



大隈半島をゆく

ルポ

1

3100 キロを踏破して

上田 斉 治

若き血潮に身を任せ、二本の脚を頼りにひたすら前進した雄大な地、北海道、猛暑と豪雨に見舞われ、どれだけ止めようと何度思ったかしのれない東北地方、心暖まる純真素朴な人情のそれと比べ、個性がなく、人間社会の複雑さと、誘惑に負けかけた関東地方、わが母校に近づくにつれ何かなんでもやらねばならぬと決意した関西地方、心に余裕が出来て珍道中を歩んだ中国地方、これからの人生を見極めようとした九州、最後の鹿児島で人間本来の姿をこの目で見たあの民情、そして喜びも悲しみも今はただ静かに振り返っている現在、このように一歩一歩と変って来た私の心境、これらの全てはこの奇想天外な学生時代を切り離して考えることは出来ない。

私はもともと歩くことには関心もなく、好きでもないが、同じやるなら誰もやっていないことをモットーに徒歩旅行を思い立ったのである。そして歩くことにより精神力、体力を試めし、多くの人々と接し、見聞を広め、また視野を広くもって社会勉強の一つとして社会福祉施設訪問を決意したのであるが、一

年間の計画中は決して甘くはなかった。

卒業は一年浪人したと思へば悔はない、しかし簡単に一年を延ばすといっても、そうはいかなかった。一番釘を刺されたのが家の猛烈な反対、当然考えねばならない。

しかし、それを完全に妨げたのが卒業試験を知った上で落してしまったこと。開いた口が閉がらないのは両親。あとは逆に成功を祈って私のために一生懸命になって応援、神社へ歩行日数の一七九日間参ってもらったことに感謝せざるを得ない。

つぎに直面したのが資金面、これが根本的な問題であった。ここで体育会がこれを取り上げ、〃同志社創立九十周年記念〃として再出発した。われわれは関係OBや校友諸賢、一般篤志家等の協力を求めて奔走したが、なお不足で基金募集のためジャズコンサートまで行なった。

やがて体育会徒歩縦断実行委員会の努力が実り、三九年六月八日京都出発の運びとなった。六月十五日稚内市長浜森辰雄氏から手渡された同志社総長宛、鹿児島市長宛の両メッセージを持ち、最北の地、稚内の宗谷岬を勇躍出発したのである。第一歩を踏みしめた感

激は今もって忘れ難い。

2

ここで支援歩行者を紹介しておこう。三浦

君(経三) 旭川まで共に歩く、杉森君(経三)と実行委員長本田君(経三)は青森、盛岡、宮脇君(経三)は盛岡、仙台、仙台、二本松は川北君(商三)、東京、箱根は前体育会委員長斉藤君(経三)と藤原君(商四)、静岡、豊橋は角谷君(経三)、名古屋、京都は私の弟香(里高校三)、広島、下関は山田君(経二)、久留米、熊本は池端君(商四)熊本、佐多岬は私の弟(経二)と牧浦君(経二)である。

出発して間もない頃かがとの足豆が出来てはつぶれ血がにじみ出て、それに輪をかけてリュックの重みが肩にくい込み苦しかった。

「何故この時世に歩かねばならないのか」、当然分っていることながらこのようなことを頻りに考えていた。その時はいつも目の色が変っているときで苦痛から逃がれようとするための考えである。しかし逃がれようと思えば何時でも逃がれることも出来たが、それが出来なかったのは計画中よく人から馬鹿にされ笑われたりしたからだ……「今ここで挫折

すれば俺の立場がない」このことが私の気力に對する支えにもなったのであるが、何か人のためにやっているような錯覚さえ感じられたのである。

また精神面で強烈に私の心を支えてくれたのは不幸な星の下に生活する施設の老人や子供たちで、その老人の息子となり、こどもの兄となつて一緒に話し、遊んで過す幸せなひととき、そしてヒゲの兄ちゃんのような強い人間になりたい〃〃兄ちゃんに負けないうがんばる〃とその意気を示してくれ、その都度可愛い手紙を道中で受けとり「よしこの子供たちのおこがれ、否手本になるため、たとえ乞食になつても、また死んでも期待にしよう頑張らなければ」と心に固く誓った。慰問をしに行つて慰問されているとは申訳ないことである。

行脚も三、四ヵ月になると私の顔には一つ印象に残るヒゲが六センチほど伸びていた。しかし、浮浪者と見間違われる姿だけに雨、風を避ける一夜の宿を借りるのが何よりの苦勞で、お寺や学校などの一隅に横になれるのはいい方である。野宿も数え切れないほどで暑さもきびしい八月、東北地方のテントなし

で橋の下の野宿は蚊と暑さに攻められ、それを防ぐために真ッ裸で一時間ほど川へ入ってコックリやる始末、また歩き疲れての夕暮れ、路傍の寺や民家へ一夜の宿を求めるとき、一番冷たくあしらわれたのが女性、それで宿を求めて門戸を叩いた際、応待者が女性の場合は宿を諦める、そして断わられたときはほど、一番わびしく辛いと思ったことはなかった。

道端に宿を決めて、星空を仰ぐとき、野良犬の子でもいいから無性に仲間が欲しくなり私まで犬か猫になりたいとわびしく思った。「くそッ!! 何でこんなにしてまでやらなあかんのか」「こんなこと初めから分っていたら止めていたのに」。その日は余りにも冷たく感じられた。

3

私は主に国道をスタコラと歩んだ。現在の国道は交通戦争そのもの、夜は危なくて一歩も歩けない。

日中でもある雨の日、幸い怪我はなかったが神風オートバイに正面衝突一瞬これまでか、と思った。また道路には犬や猫の犠死体がよく転がっているのを見ると、今日自分が

こうして元気に歩いているのが「不思議」と錯覚を起すのである。以後車には細心の注意を払ったのは言うまでもない。

しかし、私の姿を見て親切心でトラックの運転手らが乗せてあげよう、乗りなぐと言われる時、私の心は複雑であった。その好意には感謝するが私の立場として有難迷惑と言わざるを得ない。何度その気になって脚を車に乗せかけたか、誘惑も誘惑だが残酷きわまる行為である。行き交う地方の人々から「おい、がんばれよう」と、これが一番慰められる。

若い力は九州に入ってもなお衰えず? 自分をもっと厳しくするため、裸足で歩いたのである。だが常日頃裸足などやっていないため、針山を歩くに等しい。一歩一歩が恐ろしく、痛さを堪えると笑えてくる。この格好を一般の人が見ると滑稽そのもの「あんだ、阿呆と違いますか」表現のしようもないため、この言葉が飛んだのであろう。私自身嘔然とした。あほく歩いていてこんな言葉聞いたの初めて。この裸足行脚もそう長くは続かなかった。六日目にして完全に立てなくなりダウン!! それはあほくに終わったのである。

熊本市の頃より佐多岬を意識し、

もういくつ寝ると佐多岬

岬に着いたら盃かわし

リュック捨てて遊びませう

早く来い来い佐多岬

このような歌を頭に描いて歩いてしたが、かえって岬がこない。しかし岬が歩一歩近くにつれ何か無性に淋しく感じ今までのことがぐいぐいこみ上ってくる。

歩くことが私にとって日常の生活に変わってしまっているからだろう。

鹿児島市長にメッセージを無事に手渡した時肩の荷が降りた、使命が果たしたと思った。

こう思ったことが、このあと佐多岬に行くまでの五日間、気が抜けたようで歩くのを辛らく感じたが「九俣の功を一簣に虧く」ことも出来ず、殊に強烈に私の心を励ましてくれたのが鹿児島人の人情で、田舎道で逢った子供たちの礼儀正しいお辞儀、行きずりの私に示してくれた親身な好意は今も忘れがたい。それはその土地の気候、風土や環境で人間の生活態度が変わるのであり、うるわしい人間の姿はまだ無くなっていないと私は感じた。また桜島を通過するとき、その山の雄大さに

驚き、私自身、富士山はもちろんのことこのような山になりたいと思つた。

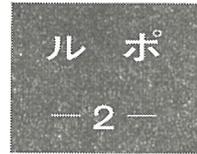
南国情緒豊かなフェニックス、蘇鉄、バナナ、椰子等亜熱帯植物が生い繁る佐多。あの雄大な北海道とこの鹿児島を見ると確かにそれぞれの特色が判然として共に異国的な感じがするが、日本の国にはまだこのような所があるのかと私ら都会人は心強く感ずる。

かくて病氣一つせずして無事、日本最南の地佐多岬へ十二月十日に辿り着いた。

最北の地を出発した時とは別に、呆氣に取られたようで、その実感は当時湧くどころか「ほんとにこれで終ったのか」その繰返しで盃をかわすことも忘れてしまった。「何んやったら台湾まで行くか」の馬力はまだあつたのである。

何事も自分の信念を貫き、自分に対し常に冷静であれば為しえないことはないと思つている。旅を終え、私自身一つの自信が出来たこと、これが徒歩旅行での収穫であつた。

(法学部四回生)



台湾の山ぶらりぶらり

原 雅 子

十一月三日に日本をたち、ごく個人的に一月ほど台湾の山を歩いて来た。

日本の九州より少し小さい所に三千級級の山が百近くもある、と聞いていても実のところ「最高峯といつたつて四千級ちよつとかける位、まあまあ……」てな程度しか考えることができなかつたし、日本統治時代の古めかしい地図を見ても同じことだつた。そんなわけで現地に行つたところ、想像以上の大きさと深さに驚ろいたりまいつたり。

苔むした原始林があつたり、背丈ほどもある一面の熊笹に道をふさがれたり(日本の山ではとても考えられない、ほとんど三千級近いところである)ちよつとしたバランスを要求される岩場があつたり、穂高の滝谷級の断崖、下が見えないほどのガレ場等々実に豊かなのだ。木のおいと土のおいでぶんぶ

んした台湾の山。なめていたわけではないけれど体力的にひどくつちめられた。山自体の魅力はともかく、山のふもとに住む、かつて高砂族と呼ばれた人たち(台湾の先住民族、九種族もあつてそれぞれが異なつた言語を持つている)との接触は興味深くまた楽しいものであつた。日本語の上手な彼らから、戦争の話をずい分聞いた。ニューギニアの最前線に行つたとか、特攻隊だつたとか、戦争体験のない私には、珍らしくもあり、また割り切れないみじめさのようなものを幾度か感じた。日本の流行歌を一緒に唄つたりもした。どうやら私は台湾の山の魅力のとりこになつてしまつたらしい。

ピアン社―桃山―大霸尖山―しみだ山―次高山―シカヨウ社(社というのは村という意味だろう)と八日間ほどかかつて歩いた。

第一の目的である大霸尖山の肩(世紀の奇峯と呼ばれ凸形をしている)に着いたのは台北を出て四日目だった。

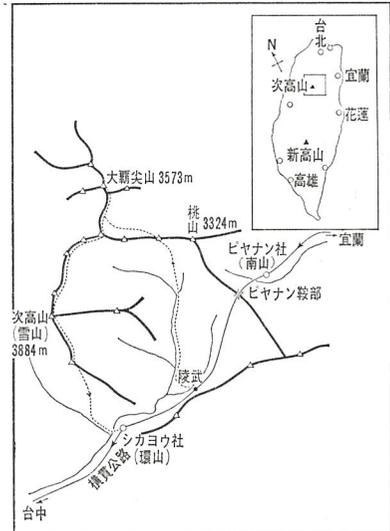
十一月五日 一緒に行く台湾の人たちといわいがやがや仕度をし、二〇時三五分発の宜蘭行きに乗り込む。知り合ったばかりの山友達が大量見送ってくれる。約束してあった女の人はとうとう都合がつかず、女は私一人ということになる。ザックも靴もすべて平常私が使っているものだし、夜汽車にこうやって座っていると、日本以外のところにいるなんて気持は全然しない。宜蘭泊り。

六日 宜蘭から半日ほどバスにゆられる。車中、入山許可証(山へ登らなくても山岳地帯へ入るだけでこれが絶対必要)の検査とかなかなかうるさい。五〇〇近くもある大きな蛮刀を腰にさした大男が乗り込んで来た。早口にわけのわからない言葉でワーワーしゃべっている。いささか恐れをなしていたら、なんと彼が私たちのポーターとなってくれる人だった。強烈な第一印象。実に精神ない顔をしている。武陵でバスをおりる。はるかに遠く次高山が美しい青色をして見える。桃山からの尾根の末端ぎりぎりまでキャワン溪を

つめる。ここまで来るともう次高は見えない。

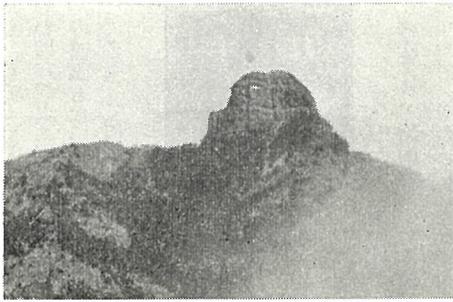
夜は河原で火をたき、上を向いて歩こうの歌唱指導。実によく日本の流行歌を知っている。舟木一夫云々にはまったく驚ろかされた。台湾の人たちにとってさえ特異な存在である山の人(高砂ーこのあたりはタイヤール族)とごく自然にしゃべり、食事をし、一緒に行動できるなんて、山をやっている(う)良さの一つじゃないかな。うれしい時間だった。

七日 峻線めざして急な登りをゆっくり歩く。消えそうなふみ跡をたどりひたすら登る。岩がごろごろかさなつたような岩陵に出た。そのピークは通らず廻り道で下の方を行けるようになってるのだ。登りの単調さに嫌気がさし始めていた時なので「あれを直登」でなことになる。いかもの食いのなんとやらで、たちまち元気を出してよじ登る。おそろくこんな小さなピークへわざわざ寄り道して登ってゆく人もあるまい。一つこれに名前を



つけよう、と調子がいい。結局、日本から来た、たった一人の女の子に敬意を表して……私の名前の雅子岩となった。

えんえんと続く登りにうんざりする。なにを好きこのんで台湾くんだりまで苦労しに思う。プッシュが始まると呑気にそんなことを思っただけではない。身体中にくっついてくる笹を両手両足でかきわけけるのだ。四時、タマラップ山の頂上へやと出る。南湖大山、中央尖山等三千以上の山なみが、ガスの中で見えかくれする。大きい。岩場の峻線はすばつと



大 霸 尖 山

なんと
また、
れも、
昔、そ
ほどの
かする
ふかふ
の裏が
い。足
かで寒
らに静
はやた
原始林
むした
むれ昔

切れていて、そのままはとも行けない。ひどいガレ場を通りぬけ、草原のテント地へ。夕焼の中に大霸尖山、小霸尖山を始めて見た。マッチ箱をたてにしたような形が大小ならんでいる。世紀の奇峯とはよくいったものだ。きたない池のたまり水にはまいったが、日本から持参したインスタントコーヒーにはど気嫌だった。

八日 ブッシュの中をいやというほど下る。

もいえない美しい色をしている。再び稜線に出る頃雨もやみ、目さず大霸尖山がぐっと近づいてくる。とたんに元気が出て冷やかされる。次に来る人のためにもと蚤刀をふりまわし、すばすば切開いていく。ためしに持たせてもらったが、重くてとても振り回せるしろものではない。水場まで下り、テントを張る。九日 天気が悪く、昼頃やっと出発できた。沢をぐんぐんつめて肩へ、ガスついで何も見えない。岩はしごをよじ登る。頂上の直下二百メートルのところで「さあ、トップを」と道をゆずられる。いつもの調子でノソノソ歩く。お宮さんがある。頂上だ。「女の子は数えるほどしか登ってないよ」いささかバチ気味の私へ台湾山岳会の周さんという。一番立派だという北面を見るため、肩のところが廻り込む。まったくもうそんな岩だ。小さな石ころがたえすカラカラ落ちていて。垂直に切りたった北面はさすが素晴らしい。半分ほど廻り込んでいたのでそのまま進んでみようということになる。片方は垂直の壁。片方は下が見えないほどのガレ場。長い一時間だった。ほんの五、六百メートルのところを素晴らしい

いポーターの陳さんに助けられて私もなんとか通り抜けることができた。「あそこは絶対通行不可といわれていたところだ」とポーターや台湾の人たちは大喜びだ。もう一度といわれてもますます遠慮したいところだ。結局、無事一廻りできテント地へおる。変に赤い夕焼が印象的だった。

台湾で二番目に高い次高山まで三日間、相変らずのブッシュに泣かされ、岩場を通り、原始林に寝ての道だった。噂に聞いたシミダの断崖もさすがにすごかった。私たちは大分下のガレ場を通ったけれど、稜線通しに行ければたいしたものだろう。次高頂上で同志社讃嶺岳会の名前を見つけてうれしかった。

次高の夕暮を忘れることは出来ない。遠く新高の頭まで三千メートルの山のえんえんとした連なり。やっぱり来てよかった。そんな言葉がごく自然に出てくる。

台北に一度帰り、再び新高山へ一週間ほど入った。阿里山―新高山―八通関―東浦温泉とこれもまたまた苦勞させられた。

台湾にいらっしやる同志社の先輩たちから、古き良き同志社の話をいっぱい聞かされ



たり、ごちそうしていただいたりして大変お世話になった。同志社の学生というだけではない。卒業して何年になるか知らないけど、い

東南アジアを歩く

宮生英治・村田正木

東南アジア諸国を歩いてみようーこんな大それた考えを二人が持ち始めたのが今から丁

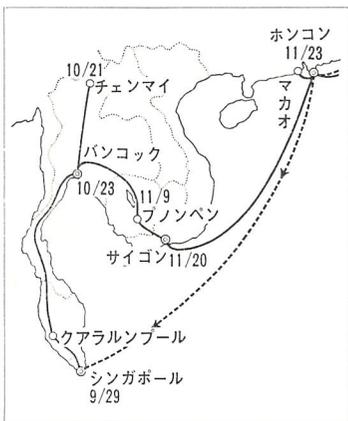
度一年前、「東南アジアは危険だよ」「ベトナムに気をつけろ」こんな忠告もうわの空に聞きながら、まあ何とかなるだろうと二人が神戸港を出航し、シンガポールに向ったのが昨年九月十七日。韓国、沖縄、香港を経てシンガポール到着が二十九日。われわれの旅もこれからだ、と思うと不思議と身が引きしまる。重い肩のザックもさほど重く感じられない。何でも見てやろう。何でも聞いてやろう。何でも起れ、たとへそれが危険な事であろうとも、こんな事を期待しながら、われわれは歩

まだに同志社のことをなつかしく思い、見つけていてくださる先輩が台湾に大勢おられることを記して筆をおく。
(文学部三回生)

いた。

マレーシアを北上す

マラッカ、クアラルンプール、イポーと戦争の思い出をたどるとく北上していく。しかし一体どこに反日感情があるのだろうか。シンガポールの郊外には行かない方がいい。マレーの田舎は反日感情が強いよ。戦争では痛めつけたからね。こんな言葉を何度となく耳にしてきたし、新聞でも読んだような気がする。しかしどこにもそんなものは感じられない。いたって友好的なのだ。ある時シンガポールの学生につきつきと友人を紹介さ



れたのだが、その学生はニココリ微笑んで手を差し出す彼らを見て、「反日感情なんて全くのデタラメでしょう」と言う。弁解のつもりだったのかたくさんの学生を紹介された。とにかく友好的なのは学生だけではない。田舎に行っても人々は親切である。昔を思い出しながら日本語で語ってくれるのだが、時々「キオツケ」「オマエノナマエハノ」と急に言われてドキリとする。これも日本時代の昔が懐しいのだろう。今となっては過去の残酷なあの戦争も、日本人に対する恨みではなく過ぎ去った思い出としてのみ残っているように思われた。

ゼスチャーだけの生活

「バカヤロウ」「気をつける」不思議と口からこんな言葉が出そうになる。車に泥をかけられた時、足を踏まれた時、しかしいかに激しい言葉を使っても相手には一向に通じない。その時始めてわれわれに「ああ、ここは外国なんだ」の感を抱だかせるのである。仕方な



北部タイ山間民族の子供たち

出くかかった言葉をまた口の中に入れてしまふ。(この後味のいかに悪いことか)「ココハ日本ジャナイゾ外国ナンダク」とわれわれに感じさせたのは、あの風変わりな家屋でもなく、タイのエメラルド寺院でもなく、あの有名なアンコールワットでもない。ましてわれわれ日本人とほとんど容貌の変わらない東南アジア諸国の人々でもない。それはあのミミズが這ったような文字であり、彼らの語すチンプンカンな言葉である。われわれがいかに説明しようとも全然相手に通じない。ゼスチャーだけの生活がわれわれに異国情緒を感じさせたのである。東南アジアをヒッチハイクしているわれわれにしてみれば、その国の言葉は絶対的必要条件であった。地図を片手に「ここに行きたい」「乗せて欲しい」英語好きな日本人がいかに上手に英語で話そうとも、こんなタイの田舎で英語が通じるはずがない。流暢なわれわれの日本語の方がよほど彼らにはわかりやすいのである。バンコックからチェンマイに到る間はいつも日本語オンリー。「どこそこに行きたい。車に乗せて欲しい」ゼスチャーで示して飛び乗る。これがわれわれのヒッチハイクを可能ならしめた唯一の手段で

ある。どこに車が行こうとそんなことはかまわない。あのただだ広い平野に曲りくねった道があるうはずがない。もし車が小さな通りに曲るならばメインストリートから外れてしまったことにまず間違いはないのである。この勘はわれわれを迷わすことなく、いつも目的地まで運んでくれた。われわれの勘はずばらしいかった。車が曲れば「トマレトマレ」とどなる。ストップという英語は彼らにとつてはあまりにもキザすぎる。トマレの方がよっぽど適格。トラックを利用した時など、いかにわれわれが大声で叫び、荷台から運転席にドンドンとやったことかご想像願いたい。車が止ると飛び降りる。「コップチャイ(ありがとう)」「ラゴーン(さよなら)」われわれはどこに行っても礼儀を心得た紳士、決してこの二つの言葉は忘れない。「どこそこに行きたいのですが乗せていただけませんか」こんな会話が出るようになった時には、悲しいかなタイとカンボジアの国境に近づいていた頃であった。

物々交換

十一月六日、われわれはタイの国境都市ア

ランプラテートにいた。タイとカンボジアの国境、それはマレーシアとタイの国境とは全く違った様相を呈していた。国交断絶している二つの国、通過が危ぶまれていたのであるが幸いにも許された。ザックを背に国境を渡る。国境でタイの子供がいつまでも手を振る。「ラゴーン・ラゴーン」われわれの口からも自然と「ラゴーン」と出る。別れを惜しんでいるのだ。数十分歩くとそこには全く違つた国カンボジアがあつた。タイの貧しさに驚いていたわれわれはカンボジアに入つてますます驚かされる。変化があまりにも激しいのだ。富んできたのではない。全く逆、線をへだてただけでこんなにも変化があるものだろうか。われわれの目には、貧しい、汚い、電燈も灯されていないおよそ事務室とはほど遠い場所である。入国手続を済ませた。目的地は岐路シソポンを通つてシエムレアップまでなのだが、ヒッチハイクが可能なほど文明化されてはいない。到底不可能である。シソポンまでは数は少ないがバスが通つているといふ。しかし、その時、われわれは一銭のカンボジア紙幣をも持ち合せていなかった。米ドル紙幣なら交

換出来るというが、われわれのはチエック、どうしようもない。しかし窮すれば通ず、どうにかなるものである。国境を通過する際、タイの金は使えなくなるものと思ひ三個のタバコを買つていたのが役に立つた。三個のタバコでシソポンまで乗車が許可された。一種の物々交換である。全く愉快だ。広漠たる湿地帯の中を車は飛ばす。道はタイと違つて案外きれいだ。約一時間半後にはシソポンに到着した。広々とした砂漠の中のオアシスの感じだ。シソポン、シエムレアップ間のバス賃は着払い。通貨を換えに行つてゐる間、不平もいわずに待つと待つていくれた車掌。やはり人を疑うことを知らないほどに呑気だ。こういう町の貧弱さ、外面的に想像していたカンボジア感も首府プノンペンに足を踏み入れると全く打ち破られた感じだ。その町の美しさに。幸いにも独立記念祭にめぐり合つたわれわれは、どちらを向いても立ち並ぶ国旗に幻惑されたのかもしれない。しかしどことなく整然とした美しさ、立ち並ぶビルを見ることによつて、やはりカンボジアの首都なのだと思つたのも事実であらう。

美しいプノンペンの町を後に、われわれは

サイゴンに入った。サイゴンもプノンペン同様フランス的な美しさに驚く。一見平和でサイゴンの町も、人々にはやはりどことなく悲しみが感じとられる。「戦争は大嫌いなんだ。でも戦わねばならない。こういうことがわかつていただけですか」と泣きそうな顔で叫んでいたサイゴン大学の学生の顔を今なお忘れることができない。ヴェトナムに平和なんて来るんだらうか。こんな事を考えながらサイゴンを後にした。

(宮生・商四、村田・経四)

父祖五代 お仕事に
染と織の いそしんで参りました



八重洲名店街6月1日開店
新キヤ店橋池袋都店東京
新橋店